

マタイの福音書 5 章 21 節から見てまいります。イエス・キリストの『山上の説教』というのは 5 章から始まっております。5 章から 7 章までの教えを『山上の垂訓』『山上の説教』と言います。この『山上の説教』を始める前にイエス・キリストは宣教の第一声を上げております。それは『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。』というものです。で、その『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。』という言葉が当時の宗教学者たち、宗教指導者たちは耳にして「私たちには別段悔い改めるべきことはないだろう。」ちょうど前節の 20 節を見て頂きたいと思います。『**20 まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません。**』ここで律法学者とパリサイ人と呼ばれている人たちが、まさに当時のユダヤ教の宗教学者、宗教指導者たちのことであり、彼らがイエス・キリストの宣教の第一声を耳にした時、『悔い改めなさい。』と言われても、「私たちは神の律法を、モーセの律法を、ことごとく忠実に遵守しております。その私たちにおいては特別悔い改めるべきことは見当たりません。私たちはアブラハムの子孫です。神に選ばれた民、ユダヤ人でありますから自動的に天国に入れてもらえる者である」と。「どうして、このイエスという男は我々に対しても『悔い改めなさい』などということと言われるのか。」そんな彼らに対してこの『山上の説教』を通してあらためて聖書の中に記されている神の律法とは何なのか。その意味するところは一体どのようなものなのか。そして律法が指し示す『罪』とは一体どのようなものなのか。それらが指し示されたならば、それだけでイエスはやめずに、「だからこそあなたがたには救い主が必要なのではないか」と。『悔い改めなさい』というのは、まさにイエスがこれから語られることでもあります。これからイエスが説明されるモーセの律法の真意。それをパリサイ人なり律法学者が知る時に、彼らは間違いなく心探られ、そして罪を示され、自分たちはどうしようもない罪人であって、そして自分自身を救うことが出来ない全く無力な者であるということに気付かされるようになります。そしてそれだけで終わらずに、だからこそ自分以外の、自分以上に力のある救い主が必要だ、ということに彼らは気付かなければならないのです。その気付きを与えるために、その必要性を示すために、イエス・キリストはこの『山上の説教』というものを私たちにも語られます。ですから、この『山上の説教』というものを正しく理解するために、健全な理解をするために、大切な鍵というのが実はこの 5 章の 20 節の言葉であったわけです。もう一度言いますと『**20 まことに、あなたがたに告げます。**（“まことに”これは原語では“Amen”です。よくよくあなたがたに言うておく。これから私が口にするのは本当に大切なことである。しっかり心に焼き付けなさい。これから大事なことを話すから。）もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、（あなたがたというのはイエスがこれをまずは弟子たちに語っています。）あなたがたは決して天の御国に、入れません。』当時の律法学者・パリサイ人たちというのは、律法の規定をことごとく守り行っている、実に忠実で、敬虔で、信心深い人たち。彼らほどパーフェクトな人たちは他にはいないだろうと思われていた人たちです。でもそんな彼らよりも正しくなければ、そんな彼ら以上に正しくなければ、天の御国には入れませんと、イエスは宣言されてます。『山上の垂訓・山上の説教』というのは、最も過激で、最も革命的な教えであります。同時に最も厳格で、最も峻厳しゅんげんな教え、最もポピュラーであり、最もショッキングな教えでもあります。最も感銘をもたらし、最も誤解される言葉でもあります。

有名なロシアの文豪レフ・トルストイという人は、この『山上の説教』というものを“小聖書”と呼んでおります。“mini bible”と呼んでおります。そして聖書というものは『山上の垂訓』だけで十分だとすら、トルストイは述べております。そのトルストイの『山上の説教』に関する言葉を皆さんに御紹介したいと思います。彼はこのマタイの 5 章から 7 章の説教を拠り所としていたということなんですが、「人類の全歴

史の中で最も深遠な発言」と述べてます。「誰でも自分よりも他人を愛するなら、この地上に神の国を築くことが出来る。人類が救われる道はこれしかない。」と、トルストイは説いておりました。「そしてキリストの教えの要点は人間がその生涯において一步一步接近しなければならない神的な完成の境地をわれわれに教え示してくれたことにある。すべての人間がキリストの教えを実行に移したならば、この地上に神の国が出現するだろう。私一人がそれを実行に移したならば、すべての人たちと自分のために最も良いことをしたことになるであろう。キリストの教えを実行すること無しには、救いは無いのである。キリストの教えを実行するためなら、どのようなつらい目に遭わされても、どのように早死にしようとも、私は怖くない」と、トルストイは言いました。でも彼が言っていることは、すべて正しいわけじゃありません。理想ではありますけれども、正しくはありません。「キリストの教えを実行することなしには、救いは無い」と、トルストイは言い切りましたが、その部分が大きく誤っております。もし、キリストの教えを実行することが出来るなら、その人は神です。もし、キリストの教えを実行することが出来るならば、キリストはそもそも人となって、ナザレのイエスとなって、この世に来られる必要性は全く無かったわけでありませぬ。確かに『山上の垂訓』これを一つ一つ実行できるならば、地上には神の国は実現されるでしょう、樹立されるでしょう。でも、そんなことは私たちには到底無理なことでもあります。ですから、トルストイは晩年非常な孤独の中に閉じ籠もる人間となって、ついには遺書を書いて、さらには妻への別れの手紙、それまでもしたためて、自殺のような家出をして、そして出先で野垂れ死んでおります。偉大なクリスチャンの文豪トルストイ。イエス・キリストの『山上の垂訓』をこよなく愛し、「これがキリスト教のすべてである。これが聖書のすべてである」と確信して、「これさえ実行出来れば完全になれる。これさえ実行出来れば、地上に神の国が打ち立てられる。」そう信じて、そう確信して、そのために生涯をささげようとしたわけですが、結局のところ彼はそれが叶わず、失望し、絶望し、ほとんど自殺のような死に方をしてしまったわけです。

興味深いことに、同じくロシアの文豪ドストエフスキーは、『山上の垂訓』というものは人間には実行不可能だと、言い切っております。非常に面白いですね。同じロシアのクリスチャンの文豪トルストイ。そしてもう一人ドストエフスキー。この二人共『山上の垂訓』を非常に意識して、高く評価しているわけですが、トルストイは「実行可能である」と考え、そしてドストエフスキーは「実行は人間には出来ない」と。面白いです。それぞれの作品も読み比べると非常に面白い、意義深い学びをすることが出来ます。ただ『山上の垂訓』というのはトルストイの考えるような“高い倫理を集めた道德訓”というものではないということです。もし、ただの“道德訓”というものであるならば、そこには救いはありません。希望なんか無いんです。結局は、人間には出来ないから、虚しい、残念、がっかりということでもあります。そのような捉え方をした人たちは、トルストイだけではありませんでした。日本で言えば、日本の文豪芥川龍之介、彼も聖書を熱心に研究した一人であります。イエス・キリストのテーマで小説も書きました。また、太宰治、有島武郎、そして正宗白鳥という人たちも皆、イエスの教えに魅了され、そして『山上の垂訓』に特に感銘を受けて、それを何とかして自分の力で実行しようと試みた人たちであります。でも、芥川にしても、太宰にしても、有島にしても、また正宗にしても、皆つまづいたわけです。正宗白鳥という人は内村鑑三の門下でありましたけれども、特に『山上の説教』を読んだ時に、これは何と不条理な教えかと。この教えにつまづいて、一時教会から離れ、信仰から離れ、むしろ背教という選りをするわけです。でも晩年になってから彼はもう一度信仰を取り戻すという幸いにも与っておりますが、彼らの共通点というのは『山上の垂訓』を“道德訓”と考えて、それを自分の意志の力で何としてでも実行しよう、理想に近づこうとして失敗した人たちです。で、最期は大抵惨めな死に方をしているわけであります。折角素晴らしい教えなのに、それを誤解して、自分の頭の中だけで、自分の肉の力だけで、何とかしようとした人たちは、皆残念ながら最期は惨めな終わり方をしているわけです。

内村鑑三がこの『山上の垂訓』についてコメントしていますけれども、それは示唆に富んでいるので皆さんに紹介させて頂きたいと思います。内村鑑三は、この『山上の垂訓』を誤解している人たちを多く知っていましたので、それを正す意味でこのような言葉を残しています。「**“山上の垂訓”**と称せず、**聖書に従って“天国の福音”**。」これは“御国の福音”という言葉ですが、**マタイ 4 : 23**に『**イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え**』とあります。その“御国の福音”というのがこの**マタイの 5 章から 7 章**における所謂昔から言われている“山上の垂訓”であると。“山上の垂訓”という言葉は聖書の中に見られません。これは英語の“the Sermon on the Mount”という正に“山の上の説教”“山上の垂訓”をそのまま漢語訳からおそらくは取り入れたと思われまゝ。“垂訓”というと“道德訓”というふうに聞こえますけれども、実際のところ聖書的には、それは“御国の福音”“天国の福音”というふうにむしろ言い直されるべきだと。そうじゃないと誤解を与えるんだと。間違った印象を与えてしまう。“道德訓”ではないんだということを、内村鑑三は言いたかったわけです。その上でもう一度読みます。「**“山上の垂訓”**と称せず、**聖書に従って“天国の福音”**と称し、その中に示されたイエスの言葉の深い意味とその相互の関係をよく理解することが出来る。物の性質はその名称に現れるものである。誤称は（誤った呼び名）それは誤解のもとである。これを“垂訓”と称するので、単にイエスの**道德律**とだけ解しやすく、そのためにその中に含まれた美しい福音を見逃しやすい。大抵の信者が“山上の垂訓”といえ**ば**イエスの倫理であると思ひ、罪人の罪を赦すための福音はこれを聖書の他の所に求めようとするのは、確かに“**山上の垂訓**”という誤称が原因であると思ふ。“垂訓”ではない。“天国の福音”である。厳格であると同時に**恩恵に満ち溢れたイエスが宣べられた喜ばしい福音である。**」この言葉に私も同調したい、賛同したいと思います。別に呼び名はどうしても良いんですけども、ただどうしてもその呼び名から間違ったイメージをもたらしてしまう、誤解をもたらすということ。これは事実だと思います。ただ私たちはもう慣れ親しんだ言い回し“**山上の垂訓**”“**山上の説教**”それをよく使うわけですので、便宜的にはその言葉をもって**マタイの 5 章から 7 章**を表現しているわけですけども、聖書的には“御国の福音”“天国の福音”であります。それはあくまで“**良い知らせ**””good news”ということですよ。

そして今から見る**マタイ 5 : 21**以降は、行動ではなくて、心が大事であるということがいろんな教えを通して語られております。行動ではなくて、心。態度と言っても良いと思います。目に見える、外側に現れる行動よりも、内側です。心の中、態度の部分、動機の一部が重要であるということでもあります。問題は行動ではなくて、心。それが今から見る内容となっております。『**人はうわべを見るが、主は心を見る。**』と言われます。行動はいくらでもパフォーマンスでごまかすことが出来ます。ポーカフェイスも使えます。でも心はごまかせません。で、神はその心をご覧になります。パリサイ人や律法学者たちは、表面的には律法を守り行っていました。でも心はそうじゃなかったんです。心は醜みにくかったんです。汚けがれていたんです。そして他者と自分を比べて、自分の方が優っている、自分のほうが優れている、自分の方が上であると。常に人との比較、**相対主義**に生きていたわけです。そして他の人たちよりも自分たちの方が熱心で、頑張っていて、そしてちゃんとやってるから、だから私たちは正しいんだと、彼らは思い込んでいたわけです。それを“**自己義認**”とか“**行為義認**”と言います。そしてこのメンタリティーは、パリサイ人・律法学者の中にだけ見られるものではなくて、すべての人の中に見られるものです。私たちは一体誰と比較しているのでしょうか。誰と自分を比べているのでしょうか。あの人と比べても私のほうが出来ている、頑張っている、真面目である、熱心である。だから私は大丈夫。そしてあの方は駄目、この人は駄目と、心の中で裁くわけです。「人と比べて自分の方が上だから、だから大丈夫。だから神に認めてもらっている。」そのように私たちが思うならば、私たちもまたパリサイ人であり、律法学者であるということですよ。そしてパリサイ人と律法学者の義だけでは天の御国には入れないと、イエスはおっしゃってるわけです。「毎日聖書を読んでいます、あの人と違って。毎日祈っています、あの人よりも。他の人たちよりも私は熱心に教会に

足繁く通っています、だから私は立派なクリスチャンです。」比べる相手が間違っています。私たちが比べるべきは、完璧なお方イエス・キリストであります。イエスと比べて私たちはどうでしょうか。出来ているでしょうか。人と比べても何の意味もありません。なぜならば、すべての人は罪人だからです。罪人たちが比べ合うのは“どんぐりの背比べ”というものです。いくら罪人同士比べたところで、何の益もありません。それはまるで死刑囚同士が「俺は百人殺したが、俺と違っておまえは二百人も人を殺している。俺のほうがマシだ」とか。それは全く不毛な議論、不毛な比較というものであります。私たちが比べるべきは、イエス・キリストというお方であります。そして、そのことを踏まえて**21節**以降を見たいと思います。

まず**21節**と**22節**を通してお読みします。『²¹昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。²²しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会議に引き渡されます。また、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。』“人を殺してはならない”というのは、勿論モーセの十戒であります。当然、人を殺すならば、裁きを受けなければならない、ということであります。これを聞いた時、パリサイ人・律法学者たちは「私たちは人なんて殺していませんよ。だから私たちは義人です。」と彼らは言い張るかも知れません。でも、そんな彼らに対して「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者（とありますが、その腹を立てるというところには、小さな*印が新改訳聖書はついております。欄外を見て頂くと、その“腹を立てる”**22節**のところに、異本に、異なる写本に、「理由なくして」の句を挿入するものがある、とあります。これは、^{こうにんほんもん}公認本文と呼ばれる写本では、英語の欽定訳聖書・king James version というものの写本では、「理由なくして腹を立てる」若しくは「理由なくして怒る者」となっております。理由もないのに腹を立てる。理由もないのに怒り散らす者）は、だれでもさばきを受けなければなりません。（その者たちは、イエスに言わせれば、殺人罪に問われると言っているんです。人を殺す時、カッとなって殺すわけであります。）兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会議に引き渡されます。（最高議会議というのは、“サンヘドリンの議会議”と呼ばれるもので、イスラエルの司法機関であります。そこで裁判を受けて、その結果死刑と宣告されると言っているわけです。原語は“能なし”というところに小さな*印が二つついてあります。「ラカ」アラム語で、とあります。アラム語というは、ヘブル語の親戚のような言葉で、当時はユダヤ人たちがヘブル語とアラム語を使っていたわけです。で、アラム語でよく「ラカ」と言ったわけです。その原意は“空っぽ”という意味です。「ラカ」というのは、本来“空っぽ”とか“無価値”、空っぽだから価値がないという意味です。それを意識で“能なし”と言っているわけです。直訳は“頭が空っぽ”という意味です。ですから“能なし”でも、まさに脳ミソが無い、まさに“空っぽ”です。“能なし”、“脳足りん”、“ボンクラ”、“頭がパー”、“頭がピーマン”。そういうことを言う者は皆、最高議会議に引き渡される。）また、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。」“燃えるゲヘナ”というのは勿論地獄のことです。この『ばか者』の方が実は“能なし”よりもちょっとキツイ言葉です。「ラカ」よりもちょっと強い調子の言葉となっています。マタイ7:26にも同じ言葉が使われています。そこでは『愚かな人』と訳されています。そこには『砂の上に自分の家を建てた愚かな人』とありますが、その“愚かな人”と同じ言葉が『ばか者』です。『ばか者』も『愚かな人』も勿論同じ意味です。でも「ラカ」よりももっとキツイ言葉です。私の妻は大阪人なんですけれども、大阪では“馬鹿”というのは結構キツイ言葉です。“阿呆”の方がまだ軽いんです。でも私は関西の人間じゃないので、軽い気持ちで「馬鹿だなあ」みたいなことを言うわけですけれども、そういう言葉を使うと彼女は非常に深く傷付きます。「阿呆」と言われれば、まだ気が楽というか、そんなに傷付くということは全く無いわけなんですけれども、逆に関東の方はむしろ「阿呆」の方が「馬鹿」よりもキツイというふうにつまみえられてしまう。そういう違いはありますけれども、「馬鹿」でも「阿呆」でも、いずれにしてもそういった言葉を使ってはな

らないと。特にそこでは、怒りを持って怒鳴るようにして「ラカ」とか、『愚か者』、『ばか者』、『能なし』、『脳足りん』、『ボンクラ』とか、そのように憎悪を抱きながらも、殺意を抱きながらも、怒りを込めて人を貶したり、馬鹿にする。それは神の耳から、殺人罪であるというふうに判断されるわけであり、殺人と同じほど重い罪だと言っているわけです。「馬鹿と言ったら自分が馬鹿だ」と子どもたちは言いますが、その通りです。まさにそれは愚かな行為であります。

詩篇 37 : 8 を参照したいと思います。『怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。』

次に箴言から三つほどピックアップしたいと思います。

箴言 12 : 16 『愚か者は自分の怒りをすぐ現す。利口な者ははずかしめを受けても黙っている。』自分の怒りをすぐに現す人は、愚か者です。

箴言 14 : 16 『知恵のある者は用心深くて悪を避け、愚かな者は怒りやすくて自信が強い。』

箴言 29 : 11 『愚かな者は怒りをぶちまける。しかし知恵のある者はそれを内におさめる。』

皆同じようなことを言っておりますが、同じようなことを何故こんなにも繰り返さなければいけないのか。わざわざ聖書の貴重な紙面を割いてまでも、どうして同様のことを繰り返さなきゃいけないのか、よくよく考えなければなりません。

また次の**伝道者の書 7 : 9** もお読みします。『軽々しく心をいらだててはならない。いらだちは愚かな者の胸にとどまるから。』どうでしょうか。「私は怒りっぽいタイプです。すぐにカッとなってしまいます。すぐにキツイ、厳しい、ひどい、汚い言葉を口から発してしまいます。うちの家系は皆そうなんです。」とか、「岸和田で育ったんですからしょうがないんです」とか、そういうことは一切言い訳にはなりません。実際に聖書では、『怒り』というものは、非常に恐ろしいもの、危険なもの、人殺しへと私たちに誘うものであります。ですから、実際に人を手にかけてなくても日常的に心の中で怒りをもって、また突き刺すような言葉をもって、その人の人格を滅多刺しにしてしまうようなひどい言葉をもって私たちは殺人を日常的に犯しているということです。『能なし』『ばか者』そういう言葉を浴びせることで、その相手の心にダメージを与えているわけです。心を突き刺している、“言葉の暴力”とも言います。そういう怒った口調でその人を軽蔑するような、その人の人格を全否定するような、そういう汚い言葉を使うことで、その人は死んでるんです。その人の内側の何か必ず死ぬんです。そのことをイエスは説いております。勿論誤解の無いようにして頂きたいと思います。“怒り”というものが何でもかんでも悪いと言っているのではありません。怒りに任せてコントロール不能な状態になっているのが危険だと言っているわけです。それが人殺しへと繋がると言っているわけです。むしろ節度ある怒り、制御可能な怒りであるならば、それは容認されるということです。**エペソ 4 : 26** をお読みしたいと思います。『怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。』“怒ってはいけません”とは書いてません。『怒っても(怒っていいんです。ただし)、罪を犯してはなりません。(難しいことです。怒る時、私たちは大抵罪を犯してしまいますから、出来たら怒らない方が良いに決まっています。これは丁度“酒によってはいけない”という言葉に似ています。酒に酔ってはいけないけれども、酒は飲んででもいい。でも酒を飲んで、酒に酔わないというのはかなり難しいことです。それと似ています。ですから、怒らない方が良いに決まっていますが、ただ“怒っても、罪を犯してはなりません”そして、) 日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。』次の日までその怒りを持ち越してはならないということです。ですから次の日になっても、まだブンブンしているとか、まだ機嫌が悪い。それは明らかに罪を犯している状態です。その怒りが最初は正当なものだったとしてもです。もう既に怒りを翌日まで持ち越している時点で、その怒っている人に罪が問われるということです。すぐに感情的になってプチ切れる。みさかえなく怒鳴り散らす。これはいつでも人を殺せる状態にあるということです。そして、**ヤコブ 1 : 19~20** もお読みしたいと思います。『¹⁹愛す

る兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。(ここでも“怒ってはならない”とは書いてません。怒るにはおそいようにしなさい。すぐに怒る。すぐにブチ切れる。これはいけないことです。) **20 人の怒りは、神の義を実現するものではありません。』**感情的になって、カッとなって、怒ってしまうと大体罪を犯してしまいますから、当然そのような怒りでは神の義を実現することはできません。ただし、正当な怒り、いわゆる義憤というものがあるということも知って下さい。それは罪を一つも犯さなかったイエス・キリストの内に見られるものです。イエスは心優しくへりくだった方ですけれども、烈火の如く怒ったこともあります。そしてパリサイ人・律法学者たちが偽善の罪に陥っている時には、厳しい言葉で「まむしの末たち」と。言い換えれば「おまえたちはサタンの子だ」と言っているわけです。そして宮清めをなさった時には、だれもイエスを止めることが出来なかった程、イエスは怒りを露わにされました。正当な怒りというものは認められます。義憤というものは確かに存在しますし、それはむしろ時には行使されなければいけない。怒るべき時は怒らなければいけない。怒るべき時に怒らずに、どうでも良い時にくだらないことで、ちょっとしたことで、癩癩を起こして、不機嫌になって、そしていつまでもカッカしている。それは不当な怒りというものです。それは義憤ではなくて、不義の怒りであります。そのような怒りは非常に危険なものです。イエス・キリストは、殺人の罪というのは正に心から始まり、そしてまずは怒りから始まる。時には正当な理由が無いのに、理由なしに怒る。どうでも良いようなこと、そこまで怒る必要も無いのに怒ってしまう。そこまで憎む必要が無いのに、そこまで恨む必要が無いのに、カッときてしまう。そしてそのカッときた感情に身を任せて、そして制御不能となっていくの間にか首を絞めている。いつの間にか刃物を手にしている。ここにいる全員が殺人犯の予備軍であるということ覚えて下さい。「私は殺人犯ではありません。そんな無差別殺人なんか、とんでもありません。」私はいつもそういう凶悪事件を目にする時、耳にする時、**他人事**とはいつも思っています。私でもやりかねないと、いつも思っています。神の憐れみで、神の恵みで、怒っても罪を犯さないように守られたり、また日が暮れて翌日まで持ち越さないように神様に戒められたりして、何とか神様の憐れみで制御出来ているだけであります。それが無ければ、神の守り無しに、神の介入無しに、いわゆる地で行けば私は短気な人間ですから腹を立てたらすぐに殴ってしまったりとか、それが私の生来の真の姿です。そうやって生きてきた人間でありますから、よくイエスの言われていることが分かります。平気で人を殺せるんです。殺すつもりがなくても、怒りに任せれば簡単に人なんて殺せてしまうんです。それは一部の人たちの話ではなくて、特殊な人たちの話ではなくて、すべての人に当てはまるということです。それは宗教家と呼ばれているパリサイ人・律法学者でも例外ではないということです。怒りというものは恐ろしいものです。侮ってはいけません。「しょうがない、私は怒りっぽいから。親父もそうだったし、そのまた親父もそうだったし、うちの家系は皆そういう短気な家系なんだ」と。そういうことでは絶対に済ましてはならないということです。一方で、詩篇の中によくダビデは、敵への復讐を願って、このような言葉を何度か言っています。『**敵の頬を打ち、悪者の歯を打ち砕いて下さい**』とか、『**彼らの歯を口の中で折って下さい**』とか。「そんなこと言って良いんですか」と思ってしまう箇所ですけれども、ある人たちは、それは旧約聖書の話で新約聖書の時代に生きている私たちは、「そのような箇所は聞き捨てにして良い」というようなことを言ったりも教えたりもしますが、でも実際には旧約聖書というものは、新約聖書の靈的真理を描く絵本のようなものであります。つまり旧約聖書に言われているものは、新約聖書の中では靈的に解釈されているということです。その靈的解釈されている新約聖書の真理というものが、私たち子どもたちにもわかりやすいように、本当の出来事として、実際の出来事として、または事件なり物語として絵本のように描かれているということです。このことはエペソ 6:12 で教えられています。『**私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。**』これが新約聖書の靈的真理です。

ですから、“敵”というのは、血肉じゃない、目に見える人間ではないということです。あなたの敵は、あなたの**舅・姑**じゃないんです。あなたの敵は、あなたの夫・妻じゃないんです。あなたの敵は、あなたの子どもや、また上司・部下でもない、隣のおっちゃん・おばちゃんじゃないんです。あなたの敵は目に見えない霊的敵であります。それは悪魔、そしてその配下の悪霊たちのことであります。『**敵の頬を打ち、悪者の歯を打ち砕いて下さい**』というのは、血肉に対する教えではなくて、これは悪魔・悪霊に対する話でありますから、取り違えてはなりません。旧約と新約を切り離して、両者には何の関係も無いかのように読んではいけません。そういう誤解もありますから、もう一度ここで確認をしておきたいと思います。

で、話を戻しますと、イエスは怒ること自体を否定はしておりませんが、ただ“不当な怒り”、義憤ではなくて、“不義の怒り”に対して注意をするようにと。怒り散らして、「能なし」「ばか者」とか怒りをもって言う。相手を平気で傷つけることを言う。特別そこまで言わなくてもいいのに、特別な理由も無いのに、ただカッときてるので思わずその人の人格をズタズタにしてしまうようなことを口にする。そういうことで人は死ぬということです。言葉の暴力だけでも、実際のところ人を殺すことはいくらでもあります。「あんなこと言われたから、もう私は生きていきたくありません。」首をくくったり、飛び降りたり。「いじめられたから。あんなひどいことを言われたから。クラスの皆んなの前であんなことを」それだけで人は死んでしまうんです。夫のあなたが妻に心無い言葉を浴びせる、それだけで妻の何か死ぬんです。あなたに対する尊敬が死ぬんです。あなたに対する愛が死ぬんです。「こんなひどいことを。」妻も同じです。「能なし」「ろくに稼いでも来ない」「役立たず」そういうことは口にしないまでも、心の中で。態度が必ず相手には伝わってきます。気を付けたいと思います。

次に、テキストに戻って頂いて**マタイ 5：23～24**『²³だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、²⁴供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。』祭壇で供え物をささげる。これは勿論礼拝行為ということです。神殿に行って生贄を携えて、そこで祈りをささげ、感謝をささげ、賛美の生贄もそうです。そのような礼拝行為。祈る時必ずしもこれは教会といった宗教施設に行って礼拝をささげるだけじゃなくて、普段から神様に祈る時、普段から賛美をささげる時、そういう時に兄弟、若しくは姉妹に恨まれていること、(新共同訳聖書では、ここを『反感をもっている』というふうに訳していますが、“反感を持たれている”、“恨まれている”。) そのことに気付いたならば、その供え物を祭壇の前に置いたままにして、出て行ってまずあなたの兄弟と仲直りしなさい、和解しなさいと。関係を正しなさい、改善して健全化するように、良好なものにするように、回復させるようにということでもあります。でも、これを多くの人は誤解しております。日曜日教会に行こうと思って車に乗って向かう最中に、「あ、私の兄弟が、私の姉妹が、私のことを恨んでいる。」とそのことに気付いて、又は反感を持たれてしまっていると、そのことに気付いて、「教会に行けない。礼拝に行けない。じゃあ、家に戻ろう」とか、過去に**遡**って「兄弟姉妹に私は恨まれていないだろうか。反感を持たれていないだろうか。」とチェックして、ずっと何年も前、何十年も前に遡って、そしてそういった問題が発覚したならば、「当面は私は教会には行けないし、祈ることも出来ないし、賛美もできない。」そういうことをイエスはおっしゃってるんでしょうか。そんなことはありません。もしそれがイエスのおっしゃったことならば、ここにいる大半の人が、それをフルタイムの仕事として、それをライフワークとして一生涯ずっとそれをしなければならぬわけです。そんなことであるならば、誰も祈ることも、賛美することも、礼拝することも出来なくなってしまう。勿論イエスはそんなことをおっしゃりたいのではありません。キーワードは23節の『**そこで**』という言葉です。もし兄弟に恨まれていることを、反感を持たれていることを、そこで思い出したならば、『**そこで**』、もう行ってるんです。『**そこで**』、これは過去においてではなくて、まさに祈っている最中とか、賛美をささげている最中に、『**そこで**』です。その時には瞬時に兄弟との、姉妹

との関係を健全なものにするように、正すようにイエスは言われているわけです。祈ってる最中に「誰かに恨まれているな、反感をまたれてるな」と気付いても、それをそのままにして、放置しておいてはならない。そのことがイエスが求めていることです。ですから、過去に遡ってことごとく誰に対しても、まずそのことをチェックしながら、そして過去を蒸し返し、ほじくり返して、長い時間かけながらすべてを解消した上でないと、祈りも出来ない、賛美も出来ない、礼拝も出来ないということではないということです。むしろ逆に過去を蒸し返し、ほじくり返すならば、さらなる又新たなる痛み、火種、^{わずら}煩い、怒り、恨みというものを引き起こすだけであります。これは滅多に無いことですがけれども、いきなりある人が私の所に来て、「カズさん、あなたのことを私は赦します。数年前に私はあなたのことを恨んでいました。でも今週私は、あなたを赦す決心をしました。私はあなたを赦します。」たまに、滅多に無いですがけれども、実際にあります。で、私の方ではどうかといいますと、そんなことは全く夢にも思わず、むしろ私はその人のことを好感を持って受け止めて、その人が教会に来るのを喜んだり、その人と出会うことを本当に嬉しく思っていたわけですがけれども、でも突然いきなり告白されるわけです。「あなたのことを赦します。何年前か前、私はあなたのことを本当に恨んでました。あなたに対して反感を持っていました。」そういうことをしなさいと、イエスは言ってるんじゃないんです。実際にその人は私に対してそのことを告白して、胸につかえていた何かが消えて爽快な気分になったかもしれません。でも、それを聞いた私の方では心穏やかではなくなってしまうわけです。そんなこと夢にも思わなかったと。そんなこと一々言わなくても良いんです。ですから、イエスは「古傷に触れなさい」と言ってるんじゃないんです。むしろ、祈ってる時、賛美をささげている時、礼拝をささげている時に、聖霊があなたに示されること「これではいけない。このままではいけない。これを放置してはいけない。」と、そのような御声を聞いたならば、あなたはその御声に聞き従わなければいけない、ということをイエスはおっしゃってるんです。『祭壇に供え物をする時』なんです。霊的行為をする時なんです。その時には聖霊が力強く働きます。その際にはあなたは従わなければいけない。御声に聞き従わなければいけない。聖霊の示されるまま導かれるままに、あなたは聞き従わなければいけない。それがたとえ肉的には出来たら避けたいと思うことでも、面倒なことでも。それがイエスのおっしゃってることであります。一々人から恨まれてるかどうかを、過去に遡ってずっとチェックしなさいとか、確かめなさい、古傷を蒸し返しほじくり返す、そういうことをイエスはおっしゃってるのではありません。

次に、25～26 節をお読みします。『²⁵ あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることとなります。²⁶ まことに、あなたに告げます。あなたは最後の1コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。』“1 コドラント”というのは貨幣では本当にわずかな単位であります。丁度*印がついているので、欄外を見て頂くと、「1 コドラントは2 レプタ。それは1 デナリの64分の1」「1 デナリ」というのは、当時の一日の労働の平均賃金です。日給の大体64分の1の金額、それが1 コドラントに当たります。これは当時の慣習、法律のシステムというものを押さえておかなければなりません。原告は、訴える者は、被告人を自ら^{ほぼく}捕縛して、そして法定に自ら連行しなければならなかったんです。今日はそういうことは警察とか検察がすることですがけれども、イエスの時代はそのような警察若しくは検察官というものはおりませんでしたので、自分に対して何か悪いことを誰かがしたならば、自分に害を、損害をもたらすような事を誰かがしたならば、自らが捕えて、そして裁判所に引っ張っていかなければいけなかったわけです。それがまず背景にあります。で、原告と被告人と一緒に裁判所に行く間に、早急に解決しなければ、後の祭りになりますよ、と言ってるわけです。これは大変皮肉なことなんですけれども、投獄されてからでは、牢屋の中では働いて金を稼ぐことは出来ないわけです。何らかの害を与えてしまったならば、損害を与えてしまったならば、弁償しなければいけない、

若しくは賠償金を払わなければいけないわけですが、もう牢屋にブチ込まれたら、もうそこでは金を稼ぐことが出来ないわけです。ただ、イエスはここでは実際にはもう1コドラント、もうすべて精算しない限りは、あなたは一生そこから出ては来れません。でも、牢屋の中では働くことも金を稼ぐことも出来ないわけですから、結局は牢獄に入ったままで出て来れませんよ、ということ saying the way. 皮肉なことです。そうなる前に裁判所に向かうその道中で、被告人は原告に対して、損害を与えてしまった人に対して、すぐに謝ってその罪を認めて、そして賠償金があるならば、それをすぐに払うという約束をして、実際に払って和解しなさいと。早めに仲直りしなさい。早く和解をしなさい。時間をかけてはいけない。「いつか、そのうちに」ではいけないと言っているわけです。「いつか、そのうちに」では、却って関係が悪くなります。却って問題は複雑化してしまうということをイエスは指摘しているわけです。ただ私たちは、人から罪を指摘されても中々それを認めようとはしません。なぜならば、私たちは高慢な人間だからです。でも自分が悪いと分かっても、それでもなお私たちは謝ろうとしません。つまらないプライドが邪魔するんです。「どうして俺が、どうして私が、こんな人に、あんな奴に、謝らなければいけないのか。どうして妻に謝らなければいけないのか。どうして子どもに謝らなければいけないのか。どうして孫に謝らなければいけないのか。」特に男はつまらない、くだらないプライドによって、「すぐに仲直りをする、すぐに謝罪して関係を正す、和解するということ」は、中々やらないものであります。でもそれほど愚かなことは無いとイエスは言っているわけです。もし後回しにすれば、もし時間をかけて、謝らないですぐに和解をしなれば、状況はむしろ悪化するばかり、関係はさらに悪化するばかり、問題はさらに複雑化するばかり。「あの時すぐに謝っておけば良かった。」ということが私たちには一杯あるはずであります。特に男性の皆さん、くだらないプライドは捨てて下さい。すぐにでも謝って下さい。カッとなってしまったら、ひどい言葉を思わず発してしまったら、すぐに謝って下さい。「お前が俺を怒らせたんだ」とか、「これを言わせたのはお前がやってないから、なっていないから、言うことをきかないから。妻だろう、従え」とか。「子供のくせにどうして俺が子どもに謝らなければいけないのか。確かに俺は悪いかもしれないけど、子どもに謝るなんて、子どもに頭を下げるなんて活券こげんにかかわる。」つまらないくだらないプライドであります。そういうことをしているから、いつまでも関係は良くなりません。むしろ関係はこじれるばかり。そしていつの間にか、何で怒ったのかの忘れてしまうわけです。そして軋轢あつれきだけが残っていく。つまらないですね。くだらないことです。一生牢獄の中に居たいんですか。いつまでもあなたは牢屋の中にブチ込まれて居たいんですか。『1コドラントを支払うまでは出て来れない』と言われてるんですが、もうあなたにはそれが出来ないんです。あの時謝らなかったからです。あの時自分の過ちを認めなかったからです。そういうことがないようにとイエスはおっしゃってます。スピーディーに和解しなさい。謙虚になってすぐに自分の非を認めて、つまらないプライドを捨てて、自分より目下の者だろうと、どんなに小さい者だろうと、自分が悪かったならば、正直に認めて頭を下げて「ごめんなさい。赦して欲しい。赦してもらえたら、何でもする。」それが賢明なイエスがやりなさいと言っていることです。へりくだって謝れということです。

そして次に、27～28節。『**27『姦淫してはならない』**と言われたのを、あなたがたは聞いています。**28**しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。』もう一度確認しておきますが、イエスがおっしゃってるのは、目に見える表面に現れる行動ではありません。いわゆる法を犯した違反行為、犯罪行為を言ってるんじゃないで、むしろ問題は心の中です。行動も大事ですけども、行動以上に重要なのは、問題となるのは、心です。行動ではなくて、心が問題だというのがイエスのずっと言わんとしてることです。“姦淫”という言葉は、現代ではほとんど使われません。もう古い言葉、死語です。これは若い人に言っても「何ですか、姦淫は」と言われてしまいますが、この“姦淫”という言葉は、夫婦の枠内ではなくて、枠外で、すなわち婚外において性交渉す

るということです。平たく言えば、浮気をすること、不倫をすることです。それが“姦淫”ということです。パリサイ人・律法学者たちは「私たちは姦淫なんか犯していない。不倫なんかしていない。」と主張するかもしれませんが、イエスは「**だれでも情欲をいだいて女を見る者は**（これは男なら女。女なら男と言っても良いと思いますし、また同性愛者であるならば誰でも良いです。情欲をいだいて人を見るならば）、**すでに心の中で姦淫を犯したのです。**」心の中で陵辱^{りやうじよく}してるんです。暴行を加えているんです。レイプしているということです。アダルトビデオを見る。ポルノサイトを見る。週刊誌のヌード写真を見る。すべてそれは心の中で姦淫を犯している、姦淫罪に問われると言ってるんです。勿論これは男性ばかりの問題ではありません。女性もポルノ中毒の人は一杯います。女性でも男を見て情欲に駆られる人も一杯いるのを知っています。アメリカの大統領で福音派のクリスチャンの間でも大変知られているジミー・カーターという人、元アメリカの大統領です。そのジミー・カーターがある時、今読んだイエスの言葉、すなわち『**だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。**』という言葉をもって、私は、アメリカ大統領のジミー・カーターが「心の中で情欲をいだいて異性を見ています。」ということ認める発言をした時に、当時のアメリカ国民は非常なるショックを受けたということでありました。今の時代では考えられません。大統領が平気でホワイトハウスのその中で、心の中で情欲の目で女性を見てそして心の中で姦淫の罪を犯すどころか、文字通りの姦淫罪を犯す、不倫をするなんてことがもう今日ではいくらでも起こりうる事、別段そんなことでもショックを受けないと。そういう時代になってしまいましたけれども、当時は大統領が心の中で情欲をいだいて異性を見る、心の中で姦淫の罪を犯す。そういうことを聞くだけで人々はショックを受けたということです。でもそのショックを受けるというのは、実際のところは、全然分かっていないというリアクションです。なぜならば、それは正に偽善者のリアクションだからであります。すべての人は心の中で人を殺し、心の中で姦淫の罪を犯し、それは特別な罪ではない。それは誰もが犯す。この私も、あの人も、この人も犯す。そういう当たり前の罪である。誰もが有罪であると。そのことを本当に分かっている人は、たとえジミー・カーターが当時の大統領であったとしても、「私は心の中で姦淫の罪を犯した」と聞いても、「わかりますよ。私もそうです。」ショックは受けなわけです。でもショックを受けるというのは、実際には「自分にはそのような罪はない」と思い込んでいる人たちの話であります。聖書は『**義人はいない。ひとりもない。**』と言ってます。ここには、美人は一杯いますけれども、義人はひとりもないです。見た目は美しいかもしれませんが、心の中は醜い化け物です。皆だれもが神の前には凶悪犯^{あくらつ}です。悪辣な罪人^{あくらつ}であります。義人はひとりもないです。勿論言うまでもないことですが、イエス・キリストは例外ですけれども、それ以外はすべてもれなく、例外なく、罪人^{あくらつ}であります。たとえ人殺しなんかしてなくても、たとえ不倫なんかしてなくても、心の中でカッときて、ムカッときて、心の中で「あの人いいな。あの人と寝たい。セックスしたい。」そう思うだけで、姦淫罪に問われると言ってるわけです。

そして、**29～30 節**を見て下さい。『²⁹もし、右の目が、あなたをつまみかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。³⁰もし、右の手があなたをつまみかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。』これも文字通り捉えて、実際に目をえぐったり、実際に手を切り取るなんてことをする人たちが、残念ながらおります。“ゲヘナ”というのは先程も紹介したようにこれは地獄のことですが、イエスは文字通り右目がたとえば情欲の目で異性を見るからと言ってえぐりとりなさい、若しくは右手が何か悪いことをするから、その手を出してしまうその右手を切り取りなさいと。そういうことをイエスは勿論ここで教えているわけではありません。片目をえぐり出しても、もう片目は、左目は残るわけです。じゃあ、その左目もえぐればいいのか。右手を切り落としても、残った左手もどうやって切り取るんでしょうか。そういうことを言ってるんじゃないということは明らかです。実

際に私は、目の不自由な方が、視力を失った方が、クリスチャンで、「私が一番悩んでいるのは情欲の罪です。」ということを知ったことがあります。目が見えなくても、情欲の罪、姦淫の罪に悩み苦しむ人たちが大勢いるんです。ですから、目があるから罪を犯すという意味じゃないです。手があるから罪を犯すという意味じゃないです。むしろイエスが言わんとしていることは、あなたが罪に駆られるもの。どうしても罪に誘発されてしまう。『つまずきを与える』というのは正に“罪を犯してしまう”ということです。誘惑をもたらすようなもの。見ることによって、手を伸ばすことによって、触れることによって。そういうものがあるならば、それは何らかの活動“activity”かもしれません。それは何らかの趣味かもしれません。それは何らかの道具かもしれません。あなたの持ち物、あなたのやっつてること、関わっていること、普段目にしているもの。そうしたものがあなたを常に誘惑に、罪を犯すように訴えかけてくる、迫ってくる。そういうものがあるならば、目をえぐり取るように、片手を切り落とすが如く、徹底的に、直接的に、厳しく対処せよ、とイエスはおっしゃっているんです。時には、“力づく”でもと言っているんです。「どうしても私はインターネットのポルノ中毒がやめられないです。」時に、それがどうしても止められないならば、そのパソコンをハンマーか何かで粉々にする。目をえぐり出すが如く。手を切り落とすが如く。徹底的に、暴虐的にでも、完全破壊するようにして、ゲヘナに落ち込むよりは、焼却場に捨てるほうがまだマシだということです。「でもそれは仕事に必要なんです。でもそれは便利な道具なんです。それが無いといろいろと困るんです。」目をえぐれと言っているんです。目をえぐられるより、そっちの方が良いじゃないですか。手を切り落とすよりも、そっちの方が良いじゃないですか。徹底的に、直接的に、時には力づくでも対処しなさい。それがイエスの言わんとしていることです。そこまで厳しく言われるのは、罪があなたを傷つけるからです。罪があなたに計り知れない、想像を絶するような損害をもたらすからです。そしてあなただけじゃない。あなたの周囲の人たちも巻き込み、傷つけ、そしてあなたの周囲の人たちにも多大なダメージを、負の影響を残すからであります。不倫の罪で夫婦関係が破綻するかもしれません。家族を失うかもしれない。その始まりは、出会い系サイトだった。インターネットを普段から便利に使っている。「ちょっと魔が差したんです。ちょっと暇だったんで、クリックしただけなんです。」そこからすべてが、大きな音を出して崩れ、破壊されてしまうような、大崩壊をもたらすということです。そして、その前にイエスは、目をえぐり出すような気持ちで、手を切り落とすような気持ちで、それらに対して徹底的に、力づくでもいいから、しっかりと間違いなく対処しておくように。手遅れになる前にです。それがイエスの言わんとしていることです。

次に 31 節。また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ』とされています。』イエスの時代のパリサイ人というのは、律法に最も厳格なグループでありましたけれども、そのパリサイ人の中に二つの“学派”というものがいました。“二大学派”、二つのグループです。一つは“シャンマイ学派”と呼ばれるグループ、もう一つは“ヒレル学派”と呼ばれるグループがありました。“シャンマイ派”と“ヒレル派”と言います。“シャンマイ学派”というのは、保守的な人たちと覚えて下さい。そして“ヒレル学派”というのは、自由主義のリベラルな人たちと覚えて下さい。“シャンマイ学派”は保守的なので、聖書の律法、特に離婚の規定は申命記 24 章にありますけれども、離婚が認められるのは、離婚事由として正当なのは、それは“性的不道德の罪”が犯された場合に限る。イエスは 32 節で『不貞』という言葉を使っています。浮気や不倫、婚外交渉を行なう、それが姦淫の罪です。また『不貞』という言葉はギリシャ語の“ポルネイヤ”という言葉です。“ポルネイヤ”というのは“ポルノグラフィー”“ポルノ”の語源であります。そして、それは“性を売り物にする”というのが原意です。そこから転じて、ありとあらゆる性的不道德の罪のことを『不品行』。この『不品行』という言葉も今日は死語となってあまり使いません。性的不品行、不道德の罪です。その中には勿論ポルノ中毒とかそういう罪も入っているわけです。そういう性的不道德の罪が認められた場合に限り、離婚は認めると。それが“シャンマイ学派”の立場でした。

その一方で“ヒレル学派”は、保守的ではなくて、むしろリベラルであります。アメリカで言えば“シャンマイ派”というのが“共和党”。そして“ヒレル学派”というのが“民主党”、今のオバマさんの党です。そのように考えたら分かりやすいかもしれません。で、この“ヒレル学派”の方は、聖書の規定はそれほど重んじません。むしろ聖書の規定を現代風にアレンジしたり、現代的に解釈し直そうとして、そして自分たちに都合の良いように捉えていくわけですが、この“ヒレル学派”の人たちは、たとえ妻が料理の失敗をただけでも、(卵焼きを上手に作れなかった。ちょっと焦がしちゃった。ちょっと塩が多かった。)それだけで離婚だと言うわけです。**申命記 24 章**の規定によれば、それだけで「妻を汚れた者だ」とそう宣言して、「私はお前を離縁する。お前を離縁する。お前を離縁する。」三回言ったら、それで離婚は成立というのが“ヒレル学派”の教えでした。その一方で“シャンマイ学派”の方は、しっかりとした正式な離婚状を妻に渡さなければ離婚は成立しないと教えていたわけです。この離婚に関する話というのは、**マタイの福音書 19 章**でもイエスが取り上げています。そこでもっと詳しくお話するので、ここでは割愛させて頂きたいと思います。ただ、イエスはどちらかと言うと、パリサイ派の“シャンマイ学派”の方に近い見解を持っています。(『**だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ**』と言われていました。)”“シャンマイ学派”はそうしていたわけです。そのことを勧めていたわけです。そして、不貞以外の理由で妻を離別する者、それは不当な離婚というふうに、イエスも認めていたわけです。でもそのような不当な離婚をして、そしてその人がもう一度別の人と再婚をするならば、元妻に対して又は元夫に対して姦淫の罪を犯させるのだと、イエスは言っているわけです。離別された女と結婚すれば、姦淫を犯す。ただ、この箇所で誤解する人たちがあるわけです。離婚した者が再婚したからと言って、その人はいつまでも姦淫の罪の中に生きるのではないということです。**レビ記 20 章**によると、姦淫の罪を犯した場合は、それは石打の刑、公開処刑によって辱められた上で、殺されるわけです。死刑が姦淫罪には求められるわけです。でも、イエスはモーセの十戒などを取り上げて、大変それを厳しい口調で真意を告げておりますけれども、ここに関しては「離婚は不貞という理由においては認める」と、随分柔らかく宣べられております。**ヨハネの福音書 8 章**というところには、姦淫の現場で捕えられた女性がイエスの前に引きずり出されて来たわけです。この話も皆さんはよく知っているので、敢えてそこは開いて解説することはしませんけれども、でも結果的にイエスは最後一人取り残されて、その姦淫の現場で捕えられた女に対してイエスだけが石を投げて彼女を処刑する資格があったわけです。にもかかわらずイエスは敢えて彼女を石打にせず、「もうあなたは罪を犯してはなりません。」と、赦しの宣言をして、彼女を放免したわけです。恩赦したわけです。本来は石打の刑にしなければいけなかったんです。興味深いところですけれども、イエス・キリストはこの不貞の罪や若しくは姦淫の罪に関しては、何でもかんでも律法に照らし合わせて、杓子定規的に「全部石打の刑だ。全部処刑する。」ということはおっしゃってないわけです。ただし離婚して再婚するならば、その時に姦淫の罪を犯すことになるということは、おっしゃってます。その姦淫の罪を犯すということは、一生姦淫の罪を犯し続けるということになるのか。そのことを多くの人たちはいろんな見解をもって、この離婚の罪若しくは再婚の罪というものを重いものにしようとしたり、特別な罪にしようとしたりするわけですが、イエスは単に「離婚したものが再婚するならば、姦淫の罪を犯したことになりますよ。」と言ってるだけで、それ以上のことは言っておりません。神様の定めている結婚というのは、一夫一婦制です。それがすべての人に望まれている神の最善というものです。ベストというもの。一人の男性に対して、一人の女性と定めているわけです。死別したら結婚の絆は解かれて、再婚の事由が晴れて与えられません。でも死が分かつまでは、たとえ何があろうと結婚した者は生涯寄り添わなければいけないわけです。ただし、不貞の罪が、不品行の罪が、姦淫の罪が犯されてしまったならば、それでイエスは例外的に離婚は許容するとおっしゃってるわけです。でもそれが神様の求めているベストではないということです。ですから、「相手が不倫した。もう離婚だ。離婚しなきゃいけない。」そういう話ではないということです。

出来たら、その罪を赦して和解をして、やり直しをする。残念ながら離婚してしまったとしても、それでもまだチャンスがあって、その離婚した相手と再びよりを戻して再婚するというチョイスもあるわけです。それならば姦淫の罪を犯すということは避けられます。勿論そのまま結婚せずに独身でいるというチョイスもあるわけです。でも再婚したならば、それは姦淫の罪を犯すことになる。それは神のベストをミスするということです。神の用意した最善の形、一人の夫に対して一人の妻というその理想の形、その最善の形を自ら放棄するということです。放棄して別の異性と結婚するということです。それは勿論不幸な人生の始まりという意味ではありません。それでもベストに届かないまでも、それはセカンドベスト。最善ではないにしても、次のベスト。次善という言葉がありますね。そうして神様が憐れんで下さる、というケースもあるということです。ですから何度も言うように、神様のベストは一夫一婦制ですから一生涯死が二人を分かちまでは、何があろうと、本来はです。一生添い遂げなければいけない。そしてたとえ姦淫の罪を犯されて、「もう二人ではやっていけない。もう結婚関係は破綻だ」と言って、離婚してしまったとしても、もう一度結婚するならば、その相手を赦して、その上で同じ相手と再婚を果たす。それが神のベストです。で、そのベストは残念ながら別の人と結婚する、再婚することによってミスしてしまう、失ってしまうということです。ベストをミスするということは、最善を放棄するということは、当然のことながら“的外れ”ということになりますから、“的外れ”というのは聖書で言うところの『罪』です。『罪』とは“ハマルティア”というギリシャ語で、“的外れ”ということです。神の的を射るということが、常に神の用意されているベストを生きるということです。そのベストは、一人の夫に対して一人の妻。死が分かちまで二人は生涯添い遂げる。これが神のベストです。それを外すということは、勿論罪ということになりますから、どんなに素晴らしい相手と再婚できたとしても、それはセカンドベストに過ぎない。それはやはり的外れという意味では、罪なんです。認めたくないかもしれませんが、それは罪なんです。でもだからといって誤解しないで下さい。「姦淫の罪を犯しました。だって再婚したからです。」でも神はその罪も赦すことが出来るということ覚えて下さい。姦淫の罪は特別な罪ではないです。ある人たちは、“離婚”ということ、または離婚して“再婚”するということを、ことさらに悪い罪であるかのように一生もう神の祝福には与れないかのように烙印を押して、中には、教会の中には、聖餐式に与れない、陪餐停止なんてことも処罰として与えたりとか、特権を剥奪するというをやってしまう教会もあります。それは大変な誤解であります。離婚するのも、いろんな事由があるかもしれませんが、性格の不一致で離婚するのが今日一番多いわけです。「この人とは価値観が違うから。もうやっていけない。」簡単に離婚します。それは不当な離婚であります。でもその不当な離婚をしてしまっても、神はその罪を赦すことが出来ます。もしあなたがそれを正直に罪と認めるならばです。そして告白して「赦して下さい。私は罪を犯しました。」そしてたとえ相手が不貞の罪を犯して、「どうしても私はもう赦せない。この人とはもうとても生活出来ない。気持ちは赦せても、生理的にもこの人は私にはもう受け付けられないんです。だからもう同じ屋根の下には暮らせません。それはもう離婚という道しかない。」ということであれば、それはそれで神は認めるとおっしゃってるわけです。そのような特別な不貞という事由ならば、離婚は仕方がないけれども認める。ただし、それは本来あるべき姿ではないということです。そのまま再婚せずに独身でいるのも一つの選びですが、もし再婚するならば、これを知りなさいと、イエスは言われてるわけです。別の相手と再婚するならば、それは姦淫を犯したことになる。そうしたくなければ、勿論離婚しないのがいいわけです。イエスは簡単には離婚するなということをおっしゃってるだけであります。離婚したからといって、また別の相手と再婚したからといって、「もう一生涯罪を抱えたまま、背負ったまま生きなさい。もう呪いの人生しかない。」と、そういうことをイエスはおっしゃりたいのではないということです。イエスのおっしゃりたいのは、「何としてでも離婚は回避しなさい。たとえ正当な事由があったとしてもです。赦してあげなさい。私があなたを赦したように。」不倫の罪は特別な罪ではないんです。女性にとっては感

でも地をさしても、そのほかの何をさしてもです。ただ、「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」としなさい。それは、あなたがたが、さばきに会わないためです。』同じことをヤコブも言っています。このヤコブは主の兄弟のヤコブです。軽率な誓い。「やりますよ。出来ますよ。」とか、「やっておきますよ。」とか。出来もしないのに、プライドから出来る人間に思われたいのか、何も考えずに口癖のように軽率に約束をしてしまう。そこに神の名を持ち出すなんていうのは、言語道断だとイエスは言っているわけです。ですから、これも決して難しいことをイエスは言っているわけではありません。何もかも本当にシンプルにしなさい。大げさなことを言わずに、出来ないなら出来ないと言いなさい。『はい』は『はい』とだけ。白は白。黒は黒。グレーはない。灰色はないと。中間はないと。どちらでもないじゃなくて、『はい』か『いいえ』か、どっちかにしなさいと。こうすれば私たちの生活は大分スッキリすると思います。白黒ハッキリして明確になると思います。

で、38～42節を今度はお読みします。『³⁸『目には目で、歯には歯で』と言われたのを、あなたがたは聞いています。³⁹しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。⁴⁰あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。⁴¹あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。⁴²求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい。』と。『目には目で、歯には歯で』。これはハムラビ法典にも見られる言葉ですが、旧約聖書の中にあります。これは厳しい聞こえがするかもしれませんが、実は憐れみ深い法律であります。目には目だけ。この目というのは勿論片目です。単数形です。ですから、片目をつぶされたならば相手の片目を、その報復として、刑罰として求める事が出来る。歯一本に対しては、歯一本のみ。これを同害復讐法と言います。過度な復讐を制御する、制限する憐れみ深い法律なんです。ですから、これは誤解されている節があります。『目には目で』、というのは復讐心むき出しで、そして必ず復讐してやるというような勢いを感じてしまうかもしれませんが、実は過度な復讐を抑えるための法律であります。でもこの世の自衛哲学では、私個人の肉体的な自衛哲学では、『目には目で、歯には歯で』。では終わりません。右の頬を打つものには、左の頬では我慢なりません。歯は全部折ります。右も左もボコボコにして、ついでに下っ腹も蹴り上げて、自分の気が収まるまで蹴ってやれ、半殺しにしてやれ。それがこの世の自衛哲学というものであります。私たちは恐ろしい者です。『目には目で、歯には歯で』。歯止めは効かない者であります。神は私たちの性質をよく知っておられます。でもイエスはさらに一歩進んで、悪いものには手向かってはいけない。同害復讐法を取り上げながら、むしろ復讐すらしない方が良いと。復讐心に駆られて、いつまでも復讐しなければ気が済まない、復讐しなければ許せない、というような不自由な生き方をせずに、むしろそのような復讐という権利すら放棄して、赦すという選択をした方がはるかにそれは自由であって、あなたにとっては有益なことだと。『下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。』下着といっても私たちの身につけているような下着じゃありません。これはコートのような上着の下に着ている着物のことです。ですから、裸になれと言っているわけじゃありません。また、『一ミリオン』というのは、一ミリオンは*印がついているので、1500メートルを指しますけれども、これは当時、イスラエルはローマの支配下にありまして、そこかしこにローマ兵の駐屯所があったわけです。で、ローマ兵が重い荷物を運んだりしている時にたまたまそこに通りかかったならば、あなたの肩の上にローマ兵の刀が置かれます。その時にはあなたはローマ兵の持ち物や武器や道具といったものをあなたが運ばなくてはならなかったわけです。クレネ人シモンも、過ぎ越しの祭りを祝うためにわざわざ北アフリカからやってきたんですが、その時にローマ兵に刀をその肩に置かれて、「お前がこの横棒をかつげ。」と言われたわけです。その横棒とは、イエス・キリストが運んでいたあの十字架の横棒でありました。もうそのような命令を受けたら、断ることは出来ません。断ったら、その場でバツサリということになりますので、「一ミリオン行け。1.5km それを運べ。」と言われれば、運ばなきゃいけないわけです。でも、

もしそう言われても、イヤイヤながら渋々というよりも、むしろ喜んでその倍行けど。『求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい。』これも誤解しないで下さい。勿論イエスが言わんとしていることは、自分のつまらない権利というものに執着することがどんなに自分をちっぽけな人間にしまうのか。そんなちっぽけな権利にこだわらずに、むしろそんな権利をすべて放棄したほうが、はるかに大きな、豊かな、自由な生き方が出来ますよ、ということイエスはおっしゃってるわけです。ですから、「千円貸して。」と言われたら、絶対千円貸さなきゃいけないという話ではありません。又は、片方の頬を殴られたから、「じゃあ、こっちもどうぞ。」というふうに差し出すことはありません。片方殴られそうになったら、よけて逃げたら良いわけです。そういうことを言ってるんじゃないということを知って下さい。私は小学生の時にこの箇所を読んで、どうしても理解できなかったんです。毎日喧嘩で明け暮れていたんで、右の頬を打たれたら、打たれる前に打つというのが私の哲学でしたから、とてもこんな教えは守れないと思って、中学になったら教会に行くのはやめました。でも、後でそれはそんな意味ではないということを知って、本当に恥ずかしくなりました。

で、実際にこの原則を行なった人たちがおります。それが冒頭に紹介したロシアの文豪トルストイという人です。帝政ロシアの不正に対して、トルストイはこのイエスの『山上の垂訓』の教えをもって、非暴力抵抗運動を展開しました。そして他にも日露戦争の際には、“非戦論”を説いて、戦争反対の立場で言ったわけです。そのようなトルストイに影響を受けたのが、インドの独立の父、マハトマ・ガンジーという人でありました。勿論ガンジーはクリスチャンではありませんが、ガンジーが最も愛読したのは“新約聖書”。最も感銘を受けたのは、イエス・キリストの教えでありました。ガンジーは、クリスチャンのトルストイから影響を受けたわけです。そして皆さんも知っての通り、あの非暴力無抵抗の運動をしたわけです。そのことでイギリス軍はインドから手を引いたわけであります。そして見事独立を果たしたわけです。で、そのガンジーに触発されたのが、アメリカの公民運動の父、マーティン・ルーサー・キング Jr、所謂キング牧師のことであります。皆彼らは、このイエスの『山上の垂訓』の特に**マタイ 5 : 38~42**のこの箇所をもって、非暴力をもって、悪に不正に抵抗する、対抗するという公民権運動というものを展開したわけであります。そして、彼らはこの原則に従って見事これが真理であるということ、こちらの方が優っているということを証明して見せたわけです。「右の頬を打たれて左の頬を向けるのは、そんなのは弱虫のやることだ」と私は思っていました。そうじゃなかったということが、トルストイやガンジーやキング牧師を通して、歴史がそのことを私たちに教えてくれております。弱虫じゃないんです。彼らは、非暴力をもって敢然と悪に立ち向かった勇氣ある人たちだったわけです。そして彼らは勝利したんです。インドが大英帝国に勝利したんです。黒人が白人に勝利したんです。イエスの説かれた教えは、実に実践的なんです。”practical”なんです。そして、実に力強い”powerful”なものなんです。これを実践すれば、これを当てはめれば、必ずここに書かれている通りのことが、行なわれるということです。

で、**43~48 節**。『⁴³『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。(この“聞いています”とか書かれています。これは旧約聖書から引用して、旧約聖書にはそう書いてあった。昔の人たちはそのように聞いてきたと、いう表現です。) ⁴⁴しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。 ⁴⁵それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。(日頃の行ないが良いから雨が降らずに晴天になるという話じゃありません。) ⁴⁶自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。 ⁴⁷また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。 ⁴⁸だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。』度々“だから”という言葉がありますが、これがイエスの言わんと

している部分です。「だから〇〇なんだ」と。この“だから”を読まずに、“だから”を受け止めずに、字面だけ見て勝手に解釈してはいけません。文脈から外して、イエスが言わんとしていることを全く意識しないで、勝手に解釈して、間違っはならないということです。43～44節も勿論その流れを受けて、文脈を受けてのことです。完全に権利を放棄して、所有権も放棄しますし、また復讐するという権利も放棄します。報復するんじゃなく、仕返しをするのではなく、むしろ敵を愛し返す。悪に対しては善をもって対抗する。暴力に対しては非暴力で抵抗する。すべては愛によって勝利する。それがイエスが言わんとしていることです。でも、「そう言われても、私は敵を愛するなんて、愛し返すなんて、出来ません。仇は返しますが、愛で返すなんて出来ません。」と。愛し返すことが出来ないという人に対して、イエスは具体的に「祝福しなさい。祈ってあげなさい。」と言っています。実際に言われた通り、ここに書かれている通りのことをトルストイやガンジーやキング牧師のようにやってみてください。「愛し返せません。」と言うあなたに、是非今日からあなたがどうしても許せない、あなたが敵視しているその人のことを覚えて、その人のために祈り始めてみてください。勿論祈ると言っても、「その人が裁かれますように」とか、「神がその人の歯を口の中で折ってくださるように」というような祈りじゃなく、むしろ祝福を祈るということです。敵のために、「今日一日あの人が、この人が、あなたによって祝福を受けますように。」毎日覚えて祈ってみてください。すると不思議な事が起きます。それまでは、その人のことを考えるだけでもムカつく、腹立つ、我慢ならなくなる、心が穏やかでなくなっちゃう、騒いでしまう。その人のことを思うだけで、その人の名前を出すだけで。でもその人のために祈り始めてくると、だんだんそういう思いがいつの間にかどこかへ行っていることに気がきます。そして祈っているうちに、いつもその人のことを思いながら、今頃その人はどうしているだろうか。そして、それは神に対して祈っている祈りですから、神様がその人のために一体どういうことをして下さるのだろうか。わくわくしてくる。神様はこの人を変えることが出来る。神様は想像を絶するようなことがお出来る。神の御心がその人の生活の上に成就しますように。神様がその人のために御業を成して下さるように。神様が栄光を受けて下さるように。祈っているうちに、良い意味でその人に、その敵と思えた人に対して、あなたは関心を持つようになります。できたら考えもしたくなかった、無関心だったその人のことを良い意味において関心を持って、注意を払って、そして思い出す度にとりなす、祈るということをするようになります。そしていつの間にか、神様に期待をするようになります。不思議な事です。祈れば祈るほど、もはやその人のことを憎めなくなってくるんです。敵のために祈ってたはずが、もうその人は祈りの対象となってしまったがゆえに、あなたの敵ではなくなってしまうわけです。敵が敵でなくなる。そんなことが起こるんです。もしあなたがイエスの言われた通りのことをするならばです。嫌だなあ、と思う人のために祈って下さい。我慢ならないな、という人のために祈って下さい。「どうしてもこの人は生理的に受け付けません。ウマが合わないんです。あまり^{でく}会いたくありません。」そういう人のために祈ってあげて下さい。中には「絶対に赦したくないんです。神が赦しても、私だけは。」という、そういう思いもあるかもしれませんが、是非祈ってあげて下さい。そうすると不思議な事が起こるんです。逆に、そうしないとあなたはいつまでも恨み続けます。苦々しく思い続けます。いつもその人のことを思う度に、心が穏やかじゃないですし、その人を見かけるだけで嫌な気分になりますし、目をそらして何故かあなたの方が身を隠すようなことをします。あなたは悪くないのに。出会いたくないので、口も聞きたくないので、すーっと身を隠すように。そんなことしなくていいんです、もうこれからは。イエスの言われた通り「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」と。

そして最後にもう一度48節に目を留めて下さい。結論の部分で『だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。』そうでないと、あなたは天の御国には入れませんよ、というのがイエスの言わんとしていることです。「完全であれ。完璧であれ。完全無欠、パーフェクトであれ。」「そんなの無理です。私はすぐ腹をたてるんです。短気なんです。すぐ口から“ばか者”とか、口からでまかせを言いま

す。約束をすぐ破ります。きれいなお姉ちゃんが通るとすぐに目がそっちに行ってしまう。」とか。「ついついポルノサイトを、ついついヌード写真を、ついつい手が出ます。誘惑にすぐに負けてしまうんです。」とか。とても完全ではありませんし、完全とはほど遠いんです。私は完全なる失格者です。でもそれが実はイエスが引き出したかった結論なんです。『だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。』「無理です。駄目です。私は不完全です。私は失格者です。私は罪人です。」とあなたが正直にそう感じているならば、そう告白せざるを得ないならば、それがイエスの意図であります。それでむしろいいんです。だからこそ、私たちは自分で自分を救うことが出来ないことに気づき、「このスタンダードにはとても私は見合わない。とてもイエスと比べたら私はダメ人間。あの人と比べれば私はマシだけれど、イエスと比べるならば、イエスの教えと自分の生活を照合するならば、とてもじゃないけれども、この『山上の垂訓』のように生きられない。トルストイのように頑張ってはみるものの、もう理想とはかけ離れ、ますます鬱になるばかり。どうしようもないこの私が。不甲斐ないこの私が。」でも、そこで終わってしまうんじゃない。イエス・キリストは無駄なことは命令なさいません。イエスの命令は驚くべきことに、遂行可能なものだという事です。実行可能なものです。神の言葉は神の御心を成し遂げるまでは、無駄には返って来ないんです。ですから、イエスが完全でありなさいと命令されたならば、その命令は実行可能なんです。勿論あなたは自分でこの命令を守ることが出来ません。神の律法を自分で守り行なうことは出来ないのです。でも信じて下さい。イエスが命令されたならば、これはイエスには可能なこと。もし私たちがその命令を受けて、「これは私には出来ませんが、でもあなたがおっしゃることならば、あなたが私を通して成し遂げて下さることを私は信じます。」そして「私はそうしたいんです。完全になりたいんです。完全なイエス・キリストと同じようになりたいんです。パーフェクトなお方と同じになりたいんです。」そうあなたが願い始めるならば、神はあなたのうちに良い働きを初めて、キリスト・イエスの日が来るまでに必ずそれを完成させて下さいます。これも聖書に約束されている言葉であります。第二コリント 3:18 にも、「私たちは栄光から栄光へとキリストと同じ姿に変えられます。それは御霊なる主の働きです」と。あなたの働きじゃない。主の働きです。第一ヨハネ 3:2 には、「イエス・キリストと顔と顔を合わせる日には、私たちはイエスと似た者となることが分かっています。」ですから、この命令は無駄には終わらないものだということが私たちには分かっているんです、教えられてるんです。栄光から栄光へと徐々にあっても、段階的ではあっても、ちょっぴりであっても、間違いなく確実に私たちはイエスの似姿に変えられていくんです。そして、最終的には、究極的には、イエスと顔と顔を合わせたその時には、すなわち携挙の際には、若しくは死んで天国に行った際には、必ず私たちもイエスと同じ者になる。似たものになる。すなわち完全な者になるということです。このことが私たちには約束されているんです。ですから、これは無理難題を押し付けられているんじゃないんです。出来ないことをイエスが言って、意地悪しているんじゃないんです。ただ、ダメ人間、駄目クリスチャンだという烙印を押すためにこのことを命令されているのではないんです。むしろダメ人間であることを、私たちは中々認めないので、ハッキリとイエスの言葉をもって、これでもかというイエスの言葉をもって、私たちは漸く認めざるを得ない者となって、「確かに私はあなたの言われるような者ではありません。表面的には守っているつもりでした。人からは良い人だと思われてる。それで良いと思ってました。あんな人たちとは違う。だから私は大丈夫と、そう思っていました。でも本当はそうではないということが、この『山上の説教・御国の福音』を通してよく分かりました。私は本当に駄目な者です。あの人と同じです。私はパリサイ人です。私は律法学者です。とても私の義だけでは、天国には入れて頂けません。だって私は完全でないから。だって私はイエス・キリストとはほど遠い者だから。」そこまで至ったならば御の字です。そこから神様は働きを始めて下さいます。そこからは私たちの出来るところではありません。そこからは神の領域です。神の専門分野。神はそのエキスパートだということです。イエス・キリストの専門は、救い主ですから、私たちを救うことなん

です。救い主の仕事を私たちは担うことは出来ません。救い主の仕事を私たちは奪うことは出来ません。自分を自分で救えない私たちは、この救い主に自分を差し出すこと。泳げない人、溺れている人は、どうするんですか。その人はライフガードに身を委ねるといこと。下手に暴れないほうが良いわけです。下手に暴れたら、ますます沈んでいくだけです。自分で自分を救えないならば、もう黙ってライフガードに命を委ねること。それが最も賢明なことでもあります。それと同じことをイエスは望んでおられます。「これで分かっただろう。あなたはこのままでは溺れるだけ。溺死するだけ。このわたしに任せなさい、委ねなさい。わたしのようになりたければ、生きたければ、救われたければ、このわたしに委ねなさい。あなたにはわたしが**必要だ**。わたし無しではあなたは生きていけないし、わたし無しではあなたは**天の御国、天国にすら入れない、救われないんだ**。」と。それが、イエスがこの『山上の垂訓』を通して最も伝えたいことです。そのことは、もうずっと**5章**の頭からイエスが言われていることなんですが、**6章**も**7章**もずっとイエスは同じことを繰り返し述べられていきます。“だから”、“だから”、“だから”という言葉で念を押すようにして、釘を刺すようにして、同じことを私たちに告げています。私たちに無理です。私たちに駄目です。でもそこがスタートなんです。私たちは律法をすべて守り行なうことは出来ない。私たちはこの理想的な『山上の垂訓』の生き方をすることが出来ない。でもそれは同時にグッドニュースなんです。福音なんです。出来ないことが分かったら、分かたならば、それは幸いだとイエスは頭から言っているのではないですか。『心の貧しい者は幸いです。』直訳は『**霊において貧しい者は幸いです**。』霊的破産者は幸いです。自分で自分を救うことが出来ないということに気付いた者。「私はどうしようもないもう乞食です。恵んでもらわなければ、施してもらわなければ、手を差し伸べてもらわなければ、生きていけない者です。」そう自覚している者は幸いです。何故ならば『**天の御国はその人のものだから**。』頭からイエスはそうおっしゃってるのではないですか。ですから、私たちはまた原点に立ち返って、「私は**霊的破産者**です。」良い意味で開き直って、正直に罪を認めて、プライドをかなぐり捨てて、「すぐに腹を立てる者です。すぐにカッと来るんです。プライドが邪魔して素直に謝れない者です。そして却って関係をこじらせて、そして平気で言葉の暴力で人を傷つける者です。人を刺し殺すような真似を何度もしてきました。心の中で何度も何度も情欲の目で異性を見てきました。数え切れないほどの女と寝てきました。数え切れないほどの男と寝てきました。汚れた者です。どうしようもない者です。」でもそんな者をイエス・キリストは、切り捨てない、見捨てないということを知って下さい。『**わたしもあなたを罪に定めない。これからは罪を犯してはならない。これからはわたしのよう**に生きなさい。天の父が**完全であるようにあなたがたも完全でありなさい**。』と。「**そのためにわたしが手を貸そう。そのためにわたしがあなたの力となる、助けとなる。そのためにわたしは天からこの世に下って来たのだから。そのためにわたしはあの十字架の上ですべてを負ったのだから。だからわたしに委ねなさい。わたしがあなたのライフガードだから。わたしがあなたをレスキューするから**。」レスキュー隊に任せて下さい。ライフガードにすべてを委ねる時、あなたは命を得ます。そしてあなたにとってイエス・キリストは命の恩人以上の方となります。心の中でイエスを主と信じ、口で告白する者は救われます。では、今日はこれで終わりたいと思います。